



TITLE:

新餘剩價值説及び社會階級協和論

AUTHOR(S):

田島, 錦治

CITATION:

田島, 錦治. 新餘剩價值説及び社會階級協和論. 經濟論叢 1923, 16(1): 1-17

ISSUE DATE:

1923-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127987>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號 第 十 六 卷

大正二十一年一月一日發行

新餘剩價值說及社會階級協和論	法學博士 田島 錦治
租稅配分 <small>けるに於</small> 公益逆比の原則	法學博士 神戸 正雄
個人と團體との關係	法學博士 財部 靜治
<small>サン・シ モンの</small> 社會改造哲學と社會連帶思想	文學博士 米田庄太郎
マルクスの階級概念	文學博士 高田 保馬
物價調節對米價調節問題	法學博士 戸田 海市
資本論中 <small>或るの 一付の</small> 各種版本 <small>に於ける</small> 異同 <small>について</small>	法學博士 河 上 肇
今後の植民政策の基準	法學博士 山本美越乃
農業勞働自治組合制	法學博士 河田 嗣郎
營業稅改正論	法學博士 小川郷太郎
物價問題の統計的研究	法學士 汐見 三郎

經濟論叢

第十六卷 第一號 (通卷第九十一號)

大正十二年一月發行

新餘剩價值説及び社會階級協和論

田 島 錦 治

一、緒 論

二、自然法則學派の純收入説

三、自然法則學派の社會階級三分説

四、自然法則學派の純收入説とマルクス派の餘剩價值説との對照

五、社會階級三分説と二分説との長短

六、自然法則學派とマルクス派との思想の聯絡及び一致

七、新餘剩價值説及び社會階級協和論の概要

八、結 論

一

マルクス派社會主義の餘剩價值説は、社會階級を資本主若くは有産者と勞働者若くは無産者と
の兩階級に分ち、此兩階級は始より利害の關係を異にし、互に相闘争する所の者なりとの前提の
下に、其論歩を進めて、此不斷にして且益激烈となり行く所の階級闘争が結局資本主階級の覆滅

と爲ると論結す。彼等の謂ゆる餘剩價值は、労働者の無償労働に因る資本主の利潤にして 即ち一方の利は他方の損を意味すと思考するなり。

此説の誤謬は余が本誌第十四卷第一、三、四の諸號(即ち大正十一年一月三月四月刊行の分)に指摘論評したり。今や本論文に於て、余の自から正當と信ずる新餘剩價值説及び社會階級協和論を掲げて、直接には經濟の眞理及び社會の實相を明にし、間接には重ねてマルクス派の誤謬を正さむと欲す。

二

抑も餘剩價值(Mehrerth, Surplus value, la plus-value)なる語はマルクス并に其黨派の慣用語なるが、其由て來る所は蓋し自然法則學派若くは重農學派(Physiocrates)の純收入(product net)に在るものゝ如し。此學派は歐洲第十八世紀の後半に於て、各種産業中、只農業のみが純收入即ち生産費を超過する富の生産量を生ずとの説を唱へたり。其説の大要を述べれば、曰く『各種産業中唯農業のみは純收入を生ず。農夫は非常災害の場合の外は其收穫する所の穀物の量は常に彼が種子として消費したる量のみならず其年を通じて彼の食用に供したる量を償ふて尙ほ遙に餘あるものを得、此純收入は國富を増進し文明を興起する基礎なり。其他の産業は斯の如き純收入を生ずること無し。商業運輸業は既に生ぜる物を交易し移轉するに過ぎず。工業に於ては、工人は唯原料を

變形し混合し添附するに過ぎず。故に何等生ずる所あるなし。固より價値の増加は之あるべしと雖も、工業品の價格は、其原料の價格と、之が製造に従事せる工人の生計維持に要したる物品の價格との和に外ならざるを以て、即ち積み重ねたる價値の増加にして、同時に混合せられたる原料の和なり』と。自然法則學派は此理由に本づき商人并に工人を以て不生產的階級 (la classe stérile) としたり。然れども此稱號は決して輕蔑の意味を含まず、又不必要と同意味に非ざることは、彼等の力説する所なり。

自然法則學派は、或人が『商工業者は大なる利潤を得、而も往々農業者よりは一層大なる利潤を得るに非ずや』との問に答へて曰く、『商工業者の得る所の利潤は生産したるものに非ずして、獲得したるものなり。換言すれば、只一の富が他人より彼に移りたるに過ぎず。他人とは即ち農民に外ならず。農民は工人に與ふるに啻に其生産したる原料を以てするのみならず、工人の必要とする一切の生活資料を以てす。故に工人は農民の家僕に譬擬たるものなり。若し工人が農民に其製作物を賣ることに因りて大なる利潤を得たりとせば、即ち其原料の價格と生計維持の資料の價格の和に相當する額より以上のものを得たりとせば、是れ恰も富家の家僕が其主人の費用に由りて大なる利益を得ると同じくして、畢竟工人の利潤は農民階級の純收入より取りたるものにならず』と (Gide et Rist, *Histoire des doctrines économiques*, 1e éd. 1909, p. 12-15)。

三

自然法則學派は、社會階級を分ちて、第一、財産階級即ち地主 (la classe propriétaire)、第二、生産的階級即ち農民 (la classe productive)、第三、不生産的階級 (la classe stérile) 即ち工商、僕婢自由職業者の三となし、不生産的階級は農民に次ぎて重要なこと思考し、不生産なる稱號は輕蔑の意を含まずと辯解し、而して最も財産階級を尊崇して、社會階級の首位に置けり。以爲らく、農民は土地を有せずして之を財産階級に受く。而して財産階級は神の意に従ふ所の總ての富の第一の分配主宰者 (le premier dispensateur, après Dieu, de toute richesses) なり。彼等は自から土地を開墾したる人々か、又は其人々の權利を繼承したる人々なり。彼等は土地的投資 (les avances foncières) を爲したるか、又は之を爲しつゝある人々なり、土地的投資とは、開墾、圍界、建築等の費用を投することを謂ふ、換言すれば、土地を耕作に適せしむることを目的とする投資なり。此意味に於て、彼等は土地を作る (faire la terre) 者なり。生産的階級即ち農民は此土地を作る者に非ずして、借用する者なり。彼等は土地的投資を爲さずして、單に最初の投資 (les avances primitives) と毎年の投資 (es avances annuelles) とを爲す者なり。最初の投資とは、家畜、機械等、數年繼續して使用し得る資本の投下をいひ。毎年の投資とは、種子、肥料、賃銀及び生計維

持費等の如く、毎年繰返へさるる投資なり。生産的階級は其生産せる富の中より毎年の投資の金額及び最初の投資の年賦銷却額を併せたるものに相當する額を自己の所得となし、其餘即ち純收入は財産階級に納めざる可からずと。(前掲書二十頁乃至二十六頁参照)。

斯の如く財産階級か地代として農民より受取る所の純收入は、(1)其過去に於て爲せる土地的投資に對する報酬、(2)彼等の裕福なる生活費に充つべき部分、(3)將來の土地的投資に要すべき部分を留めて、其餘を租税として國家に上納すべきものなりとす。謂ゆる土地單一税の制度は是なり

四

以上畧説したる所の自然法則學派(又は重農學派)の純收入税を以て、マルクスの餘剩價值説に對照するに、至て奇妙なる差別あるを發見すべし。

第一、自然法則學派は社會階級を三分し、其中の生産的階級を農民のみより成るとなせども。マルクス派は社會階級を二分し、勞動階級のみを生産的となす。

第二、自然法則學派は財産階級即ち地主を土地を作る者なり、神意に従ふ富の第一分配主宰者なりとして尊崇すれども、マルクス派は、社會の寄生虫なり、遊手浮食の不生産者として、之を輕蔑し擯斥す。

第三、自然法則學派は工人商人を不生産的階級に屬せしむれども、猶彼等の必要を認め、マルクス派は農工商の雇傭勞動者を總て生産的階級に屬せしむれども、農工商の企業者 即ち其謂ゆる資本主(地主を含む)は總て之を不生産的なりと思考す。

第四、自然法則學派の謂ゆる純收入は、一度財産階級の手に入るも、(1)再び彼等の生活資料を講入する費用として、農民の手に復歸し、(2)將來の土地的投資となりて、直接に農民の生産を助け(3)國家に租税として納入せられ、之に依りて國家の公益的任務を施行せしむることに依りて、間接に農民の生産を助くるものなり。之に反して、マルクス派の謂ゆる餘剩價值は、勞動階級の無償勞動に基因するものにして、且其成立増加は資本として更に勞動者に無償勞動を課する手段となるが故に、餘剩價值は勞動階級を犠牲として、單に資本主階級を肥すに止まるなり。

第五、自然法則學派の擧げたる三階級民は互に相協調し共存して、共同の利福を増進すべきを本則と爲す。之に反して、マルクス派の擧げたる二階級民は絶えず鬭爭し、其一たる資本主階級は竟に覆滅すべき運命に遭ふべしと思考せらる。

由是觀之、自然法則學派とマルクス派との説は大に異なれども、自然法則學派の謂はゆる純收入の意義とマルクス派の謂はゆる餘剩價值との意義の間に共通の點ある如し。共通の點とは、即ち生産物の價值が生産費を超過する餘剩を意味することはなり。余が前に餘剩價值なる語は純收

入なる語より由來せるならむといへるは之が爲なり。且又自然法則學派が農民の生活費を以て生産費の一と思考し、マルクス派が労働者の生活費を以て労働力なる商品の價值即ち其生産費に該當すと思考せるは、亦共通の理想なりと謂ふ可し。

之を要するに此兩學派は、其時代を異にし、又其立脚地を同ふせず。一は第十八世紀の古王朝時代(*ancien régime*)に於て、君主政體を尊重し、國民の最多數を占むる農民を愛護する主意の下に、自由主義(*laisser faire, laisser passer*)を主張し。他は第十九世紀の産業革命後の時代に於て、謂ゆる資本主を抑へ、労働者を揚げむとする意思の下に、社會主義共產主義を鼓吹したるものなり。是故に社會事情の大に變化せる今日より觀、又歐洲と歴史習慣制度文物を異にせる我國より觀れば、此兩派の説の誤謬又は短所は一層明白に之を知るを得べきなり。

五

自然法則學派が社會階級を分ちて、財産階級、生産者階級、不生産者階級の三と爲したるは、蓋し當時の社會事情に適切なる所ありしもの、如し。然れども農民のみを以て生産的と爲したるは、マルクス派が労働者のみを生産的と爲したると略ば同一の誤謬に陷れるものにして、生産の眞意義を解せざるに起因す。而してマルクス派が社會階級を資本主と労働者とに二分し、又は有

産者と無産者とに二分する説の如きは、其當時即ち十九世紀の事情にも適合せざる大妄斷なりと謂はざるを得ず。通常經濟學者が地主資本主企業者及び労働者の四階級を以て生産者若くは生産協力者と爲すに對して、マルクス派は前二者を漫然一括して資本主又は有産者と汎稱し、不生産者と斷定し以て彼等の唯一の生産者と思考する労働者又は無産者と對照せしむ。此偏見謬想は余の近著「勞賃と利潤」に於て反覆批評せるが故に今亦贅せず。自然法則學派が其謂ゆる財産階級即ち地主を以て、土地を作る (*faire la terre*) 者と爲す考、詳言すれば謂ゆる土地的投資 (*les avances foncières*) を爲し、即ち開墾を爲し、境界を立て、建築を爲して、土地を耕作に適せしめて、以て生産者階級即ち農民に貸與する者と爲す考は、蓋し當時の事實に適合せる所にして、今日より之を見るも、及び我國の如きに就て言へば、亦之を全然否定する能はざるものなりとす。

夫れ文明諸國、特に舊國に於ける土壤は、其原始的自然的狀態の儘にて、小作人に貸附せられたるものは有らず。大抵始めの占有者が之を開墾し、其相續者又絶えず改良を加へ、而して他人の土地を購買したる者は、此等の開墾改良に投せられたる資本の土地に累積したるもの、換言すれば資本化する土地の價格を支拂ひたる人々なりとす。是故に地主が小作人より受取る所の小作料は、リカード氏の所謂經濟的地代即ち土地の原始的不滅的生産力に對するものゝみに非ず。其重なる部分は投入せられたる資本に對する報酬なりとす。然らば、マルクス派が地主を以て、

全然不生産的階級と爲し、其地代を以て、小作人の勞働の結果の剝奪なりと思考するの謬れるは明かなり。而して自然法則學者が地主を尊崇し、常に土地的投資を爲す人なり、土地を作る人なりといふ説は、稍過ぎたるの嫌ありと雖も、マルクス派の説に比すれば、頗る事實に適合する點に於て優れりとす。且自然法則學派の説は、啻に地主の行爲の經濟的事實を示すのみならず、其行爲の道德的義務を明かにする點に於て大に勝れり。故に現代或地方の地主が、毫も土地改良又は小作人擁護に向て投資することなく、只管小作料を誅求することにのみ留意するもの、如きは、蓋し自然法則學派の尤も惡む所なり。

六

マルクス派が階級闘争を説くに反して、自然法則派が階級協和を示すは、先づ余輩の意を獲たるものなり。前者は朔氣凜冽として草木皆枯死せんとする如く後者は春風駘蕩として百花將に開かんとする如し。斯くの如く氷炭相容れざる両派が、往々思想の聯絡又は一致あるは奇と謂はざるを得ず。既に述たる如く、純收入説と餘剩價值説との間には慥かに思想の聯絡あり、而して自然法則學派の交易に關する意見は、恰もマルクスの説と一致す。自然法則學派の説に依れば、交易は通常の場合に於ては同一價值の財貨の交換なるが故に當事者の双方を利するものに非ず。唯

一方の損失に因りて他方が利益する如き場合あるに過ぎず。故に商業は其對内的なると對外的なるとを問はず、總て不生産的にして、商人は工人と共に不生産的階級に屬すと爲す。マルクスは“Wo Gleichheit ist, ist Kein Gewinn” (同一なるものは利益なし) の格言を挙げ、自然法則學者ル・トロース (Le Trosne) とメルシエー・ド・ラ・リヴィエール (Mercier de la Rivière) 等の言を引證して凡そ商品の交易は當事者双方をして、只使用價值の上に於てのみ利益を得せしむれども、交換價值の上に於ては (同一價值の交易なるが故に) 何等の餘剩價值を生ずるものに非ずと論じたり。

マルクス及び自然法則學派に共通の缺點は價值の眞意義を解せざるに在り。隨て謂ゆる餘剩價值説及び純收入説は共に誤謬に陥りたり。余は本論文に於ては、此等の缺點及び誤謬を指摘するを以て、主たる目的と爲すものに非ず。余の自から正當と信する新餘剩價值説及び社會階級協和論を説明するに先ち此等を參照するの便宜なるを思ひ、聊か之に論及したるに止まる。

七

題して新餘剩價值説といふは、只マルクス派の餘剩價值説と異なるを示すのみ。以下説く所は現代の經濟學説を根據として、聊か臆見を加へたるものなり。

マルクスは勞働を以て價值の唯一根原と爲せども、是は誤れり。凡そ財貨の價值の眞の根源は

效用に在り、效用とは財貨が吾人の欲望を充す力を謂ふ。然れども、效用如何に大なるも、其物が吾人の欲望に對して無限に存在せば、價值なし、例へば空氣の如し。故に一物が價值を有する爲には效用ある外に分量の制限即ち稀少性を有するを要すべし。例へば未墾の沃土の如き、未だ毫も勞働を加へざるも、價值あるべし、何となれば效用と稀少性とを有すればなり。如何に多くの勞働を加ふることも、效用なければ價值を生ぜず。例へば羅馬の或暴君が罪人に課して、山を崩して、更に之を築かしめたる場合の如きは是なり。

凡そ財貨の生産とは效用を作り出すことを謂ふ、生産せられたる財貨は其分量固より限り有るが故に、價值を有すべし。故に財貨の生産は價值の作出なりとも謂ふを得るなり。自然勞働及び資本の三者を生産の要素と謂ふ。自然か自然的に效用を作り出すこと有り、例へば野生の菓實の自ら熟するが如し。然れども耕作の勞働及び耕具及び肥料等の資本の協力あるときは生産は倍加すべし。生産三要素を適當に結付る働を企業と謂ふ。企業を爲す人を企業者と謂ふ。凡そ生産には生産費を要すべし、換言すれば價值を作出する爲には價值を犠牲にするを要すべし。企業者の私經濟上より言ふときは、其生産上使用したる三生産要素に對する報酬は即ち彼の生産費なり、土地に對する地代、資本に對する利子、及び其減價銷却、勞働に對する賃銀等は是なり。此三生産要素が企業者に依りて適當に結付けられたるときは、生産費を超過する所の餘剩價值を生ずべ

し。企業者の私人經濟より見れば、餘剩價值は即ち彼の利潤なり。然れども地主資本主又は労働者の各私人經濟より見れば、地代の中にも、利子の中にも、又賃銀の中にも、各々餘剩價值を含むべし。何となれば土地は適當に使用せられたるが爲に、地主が曾て土地に投入したる資本の報酬を超ゆる地代を得べく、労働は適當に使用せられたるが爲に、労働の苦痛を償ふて尙餘りある賃銀を得べく、資本は同じく適當に使用せられたる爲に、資本主が心中に豫期せるより以上の利子を得なければなり。

一般に言へば、社會に於ける生産階級換言すれば生産協力者たる地主資本主労働者企業者の四階級は生産に協力することに由りて、何れも皆餘剩價值を得るなり。土地を貸す人も之を借りる人も共に利益し、資本を提供する人も之を利用する人も共に利益し、労働を賣る人も之を買ふ人も共に利益す。而して此互に相利益する四階級は必至的に協調和合すべきものなり、之を新餘剩價值説及び社會階級協和論の概要とす。

リカードー氏が經濟的地代の根源を土地の原始的不滅的生產力に歸するは固より謬れりと爲さずと雖も、若し土地を自然の儘に放任して、之に労働及び資本を適當に投下せざれば、生産は皆無又は僅少なるべし。播種耕耘收穫の労働も、種子肥料耒耜牛馬農舍の資本も、亦土地若くは自然の原始的不滅的生產力と相踰ちて、始めて其効果を現はすを得るなり。今假りに此三生産要素

の生産力を各十と定むるときは、此三者を適當に結合せば其結果は三十を生産するに止まらずして、五十を生産すべし。而して今假りに生産費を二十と定むるときは、二十を五十より控除して得たる三十は即ち餘剩價值なり。自作農の場合に於ては此餘剩價值は全く彼の所得に歸べし。小作農の場合に於ては、若し地主と小作人とが和衷協同しつゝあらば、此餘剩價值は彼等の間に公平に分配せらるべし。即ち地主は小作人の勞働及び資本の恩恵を受け、小作人は地主の土地及び資本の恩恵を受けて、互に相利益するなり。自然法則學派が曾て描寫し尊敬したる財産階級の如きは、歐洲に於ては漸く其跡を絶ち、又我國に於ても、近年小作爭議の漸く喧しきを聞くと雖も、全國全社會を通じて大觀するときは、地主と小作人との間の協和は双方をして多くの餘剩價值を得せしむる所以にして、爭議は一時の變態にして協和は即ち永遠の常相なるの理は明白なりとす。

工業に於ける雇主たる企業者と雇傭勞働者との關係の如きも亦然り。勞働者の勤勉熟練忠實と企業者の才幹友誼深慮とは互に相助けて多くの餘剩價值を生ずべし。夫れ勞賃の最高限を決定するものは勞働の生産力にして、其最低限を決定するものは勞働者の生活基準なり。而して生活基準高ければ、生産力は通常増大するものなるが故に、企業者が勞働者の生活基準より高き賃銀を支拂ふときは、却て彼の利潤を増加すべし。故に此兩階級が和衷協同して生産に従事すれば、兩

者共に大なる餘剩價值を得べきは明なりとす。（拙著「勞賃及び利潤」四三頁乃至九二頁參照）。

土地の貸借及び勞働の雇傭に關して、貸す者も借りる者も共に利益し、雇ふ者も雇はるゝ者も亦同じく餘剩價值を得ること前述の如し。此他資本の貸借及び貨物の賣買に就て見るも亦同様なりとす。夫れ交易は當事者双方を利益するものなるは自明の眞理なり。財貨の效用及び價值は人に由り、時に由り、又處に由りて同一ならず。是れ貸借又は賣買の人々の間又は國際間に行はれて當事者が互に利益する所以なり。自然法則學派及びマルクス派が斯かる自明の眞理を解せざりしは、全く彼等の價值の觀念の誤れるに基づく。

然れども當事者の双方を利益すべき交易は、双方が平等の地位に立つを要し、且自由競争の行はるゝを條件とす。獨占の場合、又は強國が弱國を威壓する如き場合に於ては、往々一方の利益は他方の損失に因ること固より之れ有りとす。故に社會階級協和及び國際協和は餘剩價值の發生に缺く可からざるの條件なること明なりとす。

八

上述の如く、三生產要素が適當に結合せられ、及び雇傭、貸借、賣買等の交易が自由平等の條件の下に行はれたる場合に於ては、各人に向て大なる餘剩價值を得せしむるものなり。而して此

外に餘剩價值發生の原因として特に擧げざるべからざるものは、祖先の恩、聖賢の恩、社會の恩にして此等の諸恩を總括し、擴大し、普及し、及び繼續せしむるは即ち國家の恩なりとす。

簡單なる實例を擧げて之を證せむ。河川を徒渉し、又は游ぎて遠き處に達するには、大なる勞苦を要すべし。然れども、舟筏を作り、舵、櫂又は帆を用ゐるときは、其勞苦は大に減すべし。潮流に従ひ、又は順風を追ふときは、特に然りとす。河川の航運に適し、且風潮の之を助くるは、これ自然の恩なり、舟筏、舵、櫂及び帆は即ち資本にして、之を考案し、創作し、之が利用の道を教へ且普及せしめたるは、聖賢の恩なり、聖賢の教を守り、勤勉儉約して、斯の如き資本を維持し、集積し、且改良して、後昆をして勞少くして功多きを得せしめたるは、祖先の恩なり。過去及び現在の社會を構成する民衆が、互に分業して、或者は木を伐り、或者は舟を作り、或者は芋麻を栽へ、或者は之を織りて帆布となし、或者は舟夫となる。斯の如く民衆が分業し協力して、互に相利益するは、是れ社會の恩なり。即ち一技一藝に通する各人は、他の技藝を分業する人々の恩を受くるなり。造船術の益々進歩し、航運業の愈々發達せる今日に於ては、前掲の諸恩は著しく大となるを見るべし。蒸氣の力、電氣の作用の如き、自然の恩恵は無限に増したり。是等の自然力を適當に利用する機械及び裝置の發明發見を爲せる聖賢の恩徳は非常に加はりたり。是等の機械及び裝置を有する巨舶堅艦快艇を無數に製造し、維持し、改良し、且益々増加

したるは、是れ我々祖先勤儉の恩德に非ずして何ぞや。而して斯の如き造船術の進歩及び航運業の發達に伴ふ分業及び協力の驚くべき増進は、如何に細密に且如何に廣大に社會の恩恵を浸潤流布せしめたるぞ。一言以て之を約すれば、吾人が古來今往、此等の自然、聖賢、祖先、及び社會の恩德を容易に且確實に享くるを得る所以は、即ち國家の恩德なりとす。譬へば人體ありて、日光空氣の恩を享くるが如く、民衆は國家なる組織體を成すに由りて土地河海其他自然の恩を完全に享くるを得るなり。國家の君主制たり、又は民主制たるを問はず。聖賢明哲の人が政を執り法を立つることは古來各國の史乘に顯著なり。而して民間賢哲の人も、亦國家の獎勵保護の下に於て、其知能を發揮するを得たり。然らば則ち聖賢の恩は國家の恩に一致し又は歸着すべきなり。而して、吾人の祖先は曾て此國家の恩德を蒙りて生活し、現代の社會は現に此國家の庇護の下に繁榮す。然らば則ち祖先の恩も社會の恩も共に國家の恩の大光を受けて、更に反射の小明を放つものに外ならざるなり。

以上余は理解を容易ならしむる爲に、簡單なる一例即ち造船航運に就て述べたれども、世上の萬事萬物すべて此理を推して之を説明するを得べしと信ず。即ち財貨は其有形たるも無形たるを問はず。職業は其農工商たるも自由職業たるを論せず、社會階級は地主たり、資本主たり、勞働者たり、將た企業者たるを問はず、賣る人も買ふ人も、貸手も借手も、雇主も被傭者も、

齊しく自然の恩聖賢の恩祖先の恩を受け、且相互に社會の恩を享けつゝ有り。而して此等の諸恩を綜合統一するは即ち國家の恩なりとす。余の主張する所の新餘剩價值説の基礎は即ち茲に在り、社會階級協和論の根柢は即ち茲に在り。自然法則學派の純收入説並にマルクス派の餘剩價值及び階級闘争の説は本論の主意と大に異に、又は全然反對す。然れども此兩派の學説は一部分の眞理を含む。自然法則學派が自然の恩を高調し、マルクス派が勞働恩を絶叫するは可なり。前者が聖賢の恩、國家の恩を暗示するは大に可なり、而して其階級協和の理想を含むはマルクス派の闘争説に比すれば、特に優れりとす。然れども之を要するに此兩派の純收入説及び餘剩價值説は不完全にして總ての種類の純收入又は餘剩價值を説明せず、たゞ其一部分を偏見曲解したるに止まる。然れども余が本論を草するに方り、先進經濟學者の定説に據る所は固より多く、而して題して新餘剩價值説といふ所以は、マルクス派の説に對していふのみ。古人曰く述而不作と、又曰く温故而知新と。余の短才淺學なる何ぞ敢て創作を敢てせん。唯憂ふ、近來學者往々徒らに新を競ひ、奇を衒ひ、或はマルクス主義を鼓吹し、更に一層過激化せる言論を弄して、盛に階級闘争を論じ、甚きはサンデカリズムの直接行動を勧誘し、クロボトキン等の無政府共產主義を宣傳する者あるに至れることを。余が今不敏を顧みず、呶々數千言を費やすものは、蓋し亦已むを得ざるなり。余豈辯を好まんや。